

日本国際ボランティアセンターのレシピ： タイ等でのインドシナ難民救援から 学んだこと

時代背景

1979年1月のポル・ポト政権崩壊後、多くのカンボジア難民がタイ側に逃れてきた。平行して、ベトナム難民（ボート・ピープル）、ラオス難民も、ASEAN諸国などに保護された。冷戦構造＝東西対決のもっとも激しい時期で、「ベトナム戦争」は1975年に終わっていたものの、米ソ対立、中国とソ連・ベトナムの争いは、戦争・内戦となっており、地域の人々を苦しめた。

日本における初めての本格的な難民救援活動（実践的な国際協力活動）ということで、主体である日本の市民社会も、UNHCRや政府機関とともに、手探りで国内での保護活動、東南アジア（主にタイ国）での救援活動を開始し、徐々に成長していった。

基本条件

- ①大きな層としての難民／避難民流入で、短時間に大規模で総合的な救援活動を実施しなければならなかった。
- ②一人一人の難民の中に、政治的理由と経済的理由が混在していた。
- ③構造的に、反「ソ連東欧圏／ベトナム」という政治的文脈を背負っていた。
- ④日本のNGO（当時は、国際ボランティア団体と呼ばれていた）に十分な経験と組織的体制がまだなかった。

日本国際ボランティアセンター（JVC）の対応

- ①UNHCRと連携し、他のNGO（例えばCARE、MSF）などから学びながら、現場での給水、保健・医療、教育・訓練活動等を実践した。
- ②当然難民側に、教員、建築家・大工、医療関係者などがいるので、これら難民のリソースを最大限活かす方向で活動を運営する方針をとった。



2006年スーダン南部、整備工場のスタッフと作業風景
写真提供：日本国際ボランティアセンター

- ③カオイダン・難民キャンプなどでは、技術訓練とはいえ、社会性、福祉性を取り入れて、訓練生は、女性および女性を家長とする世帯の人、独居の年少者あるいは高齢者、障害者自身や障害者をもつ世帯の人などを優先した。訓練の効率性だけを考えた場合とは訓練生の採り方が異なる。下肢の動かない障害者難民には、バイク・自動車の電気系統修理を学べる機会を作った（対象ユニットが軽く、上半身の働きで作業できるため）。
- ④日本の特徴と言い切れるか微妙であるが、JVCのボランティアは「管理者」になりきらず、個々の難民と友達になることで、個々の人々がかかえる事情や、カンボジア紛争の歴史・大状況を理解していった。その後の難民キャンプでの活動、そしてカンボジア国内の復興支援（1982年）に入っていく時の大きな支えとなった。

まとめ

日本にとってのカンボジア／インドシナ難民救援は、初めての大規模なNGO-国連-政府の連携の事例であり、「人間の安全保障」概念（難民一人ひとりに焦点をあてた保護・救援を、一人ひとりの市民が主体的に行う）の先駆けであった。

JVCは、この経験を、難民を出して



特定非営利活動法人
日本国際ボランティアセンター
代表理事

熊岡路矢

いる元の国々（インドシナ3国）の復興協力に活かし、翻って「難民を出さない、難民が本国帰還できる」条件を作っていた。1989年前後からは、インドシナ難民の本国帰還の流れで、初期の経験や人材が大いに活かされ繋がっていった。また1980年代から90年代前半の東部アフリカ（ソマリア、エチオピア）の難民救援、飢餓救援に活かし、さらに90年代半ばからの、南アフリカで、帰還難民および（外からの）難民への職業訓練につながった。2006年現在、スーダン南部での難民帰還支援と関連する職業訓練支援に、初期の経験が活かされている。

受け入れ側のタイ（市民、NGOや政府）などからの指摘によれば、1980年代の日本の難民救援活動（一部タイのスラムや農村支援）の広がり、それまで、軍事的イメージ（第二次大戦の時代）か、「経済進出＝“エコノミック・アニマル”」（60-70年代）のイメージが強かった「日本」が、もっと個々人の顔・声と共に、よりソフトで人間的な表情で見てきた、大きな契機であったとのことだ。カンボジア／インドシナ紛争解決のプロセスは、同時に、日本と東南アジア諸国の和解-融和のプロセスでもあったのであろう。

熊岡路矢（くまおか みちや）

1980年、インドシナ難民救援活動に参加。カンボジア、ベトナム、スーダン南部等でのUNHCR協力活動多数。1995年、JVCの代表に選任。現在、国際協力NGOセンター（JANIC）副理事長、東京大学大学院「人間の安全保障」プログラム特任教授。著書に「カンボジア最前線」（岩波新書）など。

JVC

JVCは、1980年タイで創設。アジア・アフリカで、長期の地域開発協力、紛争地・災害地での人道支援、提言活動を行う。